

日蓮大聖人御書全集

いたいどうしんじ

異体同心事

新版
2054
ゝ
2055

いたいどうしんじ

異体同心事

しろこそでひと

厚

綿

こそで

伯

耆

ぼう

便

宜

がもく

白小袖一つ・あつわたの小袖、はわき房のびんぎに鵝目

いっかん

承

一貫、ならびにうけたまわる。

伯

耆

ぼう

佐

渡

ぼうとう

熱

原

もの

おんこころ

はわき房・さど房等のこと、あつわらの者どもの御心ざ

いたいどうしん

ばんじ

じょう

どうたいいしん

しよじかな

し、異体同心なれば万事を成じ、同体異心なれば諸事叶う

もう

げてんさんぜんよかん

さだ

そうろう

いん

ことなしと申すことは、外典三千余巻に定まつて候。殷の

ちゅうおう

しちじゅうまんき

どうたいいしん

戦

負

紂王は、七十万騎なれども、同体異心なればいくさにまけ

しゅう

ぶおう

はつぴやくにん

いたいどうしん

ぬ。周の武王は、八百人なれども、異体同心なればかちぬ。

ひとり

こころ

ふた

こころ

こころ

違

じょう

一人の心なれども、二つの心あれば、その心たがいて成

ひやくにんせんになん

ひと 二ころ

かなら

ずることなし。百人千人なれども、一つ心なれば、必ず

こと じよう にほんこく ひとびと

たにん

たいどういしん

事を成ず。日本国の人々は、多人なれども、体同異心なれ

しよじじよう

難

にちれん

いちるい

いたいどうしん

ば、諸事成ぜんことかたし。日蓮が一類は、異体同心なれ

ひとびと

そうら

だいじ

じよう

いちじようほけきよう

広

ば、人々すくなく候えども、大事を成じて一定法華経ひろ

おほ

そうろう

あく

おほ

いちぜん

勝

まりなんと覚え候。悪は多けれども、一善にかつことなし。

たと

おほ

ひ

いっすい

消

いちもん

譬えば、多くの火あつまれども、一水にはきえぬ。この一門

も、またかくのごとし。

うえ

きへん

たねん

積

ほうこうほけきよう

篇

その上、貴辺は、多年としつもりて奉公法華経にあつく

うえ

こんど

勝

おんこころ

み

たも

おわする上、今度はいかにもすぐれて御心ざし見えさせ給

由 ひとびと もう そうろう うよし、人々も申し候、またかれらも申し候。一々に
うけたまわ にってん だいじん もう あ そうろう

承 っ て、日天にも大神にも申し上げて候ぞ。

おんふみ ごへんじもう そうら

御文はいそぎ御返事申すべく候いけれども、たしかなる

便 宜 そうら もう そうら 弁 阿 闍 梨

びんぎ候わで、いままで申し候わず。べんあざりがびん

恩 々 書 敢 そうら

ぎ、あまりそうそうにてかきあえず候いき。さては、各々

年 思 蒙古

としのころいかんがとおぼしつるもうこのこと、すでに

近 そうろう わ くに 亡 浅

ちかづきて候か。我が国のほろびんことはあさましけれ

虚 い にほんこく ひとびと

ども、これだにもそら事になるならば、日本国の人々いよ

ほけきよう ぼう ばんにんむけんじごく お 彼

いよ法華経を謗じて、万人無間地獄に墮つべし。かれだに

強

くに

亡

ほうぼう

薄

たと

もつよるならば、国はほろぶとも謗法はうすくなりなん。譬

きゆうじ

病

癒

しんじ

ひと

治

えば、灸治をしてやまいをいやし、針治にて人をなおすがご

とうじ

歎

のち

よろこ

とし。当時はなげくとも、後は悦びなり。

にちれん

ほけきよう

おんつか

にほん こく

ひとびと

だいぞくおう

日蓮は法華經の御使い、日本国の人々は大族王の

いちえんぶだい

ぶつぼう

うしな

もうここく

せつせん

げおう

一閻浮提の仏法を失いしがごとし。蒙古国は雪山の下王の

てん

おんつか

ほけきよう

ぎようじや

怨

ひとびと

ごとし。天の御使いとして、法華經の行者をあだむ人々を

ぼつ

げんしん

かいげ

起

罰せらるるか。また現身に改悔をおこしてあるならば、

あじやせおう

ほとけ

き

びやくらい

息

しじゅうねん

いのち

述

阿闍世王の仏に帰して白癩をやめ、四十年の寿をのべ、

むこん

しん

もう

くらい

登

げんしん

むしようにん

得

無根の信と申す位にのぼりて、現身に無生忍をえたりしが

きようきようきんげん
ごとし。恐々謹言。

はちがつむいか

八月六日

にちれん
日蓮

かおう
花押